NEXT　GENERATION

内陸太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＥＸＴ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｓ

【作者名】
内陸太郎

【あらすじ】
時は平成でもなく、昭和でもない。いわいる未来。
それもそんじょそこらの近い未来じゃない。かなり先の未来。
本当に先。

世界には「みな平等」という考えが生まれ、戦争という物が消滅。
文化の発達、そして技術の発達によって、過去から未来から
「時代前人」「時代後人」「異次元人（いせかいんちゅ）」など
地球だけでなく、様々な時代、星、宇宙、次元からきたものが行き

来できる
世界となっていた。
だが異次元人や時代前人には、「みな平等」という考えがないため、
再び小さな戦争があちらこちらに起こる事態となっていった。
※ただし今の時代ほどの戦争は起こっておりません。

NEXT GENERATION

時は平成でもなく、昭和でもない。いわいる未来。
それもそんじょそこらの近い未来じゃない。かなり先の未来。
本当に先。

世界には「みな平等」という考えが生まれ、戦争という物が消滅。
文化の発達、そして技術の発達によって、過去から未来から
「時代前人」「時代後人」「異次元人（いせかいんちゅ）」など
地球だけでなく、様々な時代、星、宇宙、次元からきたものが行き来できる
世界となっていた。
だが異次元人や時代前人には、「みな平等」という考えがないため、
再び小さな戦争があちらこちらに起こる事態となっていった。

※ただし今の時代ほどの戦争は起こっておりません。

プロローグ

今住んでいる私達の地球。２０１１年。
だがそれは一瞬たりとも止まることがなく、すぐ過去のものとなる。
それと引き換えにとまることなくやってくる未来。
遠いようで、今こうして話していても未来がやってきている。
その未来の地球。遥か未来の地球では「みな平等」という思想が
大流行に大流行をしていた。
戦争を行う物もいなければ、止める人間もいない。
そんな平和な時間が続いていた。

～遠い未来の地球～
「これより、不法侵入異次元人強制圧縮作戦を行う。君達Ａ班は
後ろから、
Ｂ班は進行方向から、そして私Ｃ班が、圧縮装置を作動させる。
配置につけ！」
軍服を着た６人の男達は、隊長らしき人間に言われる通り、各配置
についた。
「圧縮装置準備完了しました！」「Ａ班配置に到着」「Ｂ班も同
じく」
「よ～し・・・あとは奴が現れるのを待つだけよぉ・・・」
両手をこすり合わせて、隊長の男は言った。白い息が口から出てい
る。
この日の気温は０度ぎりぎりだった。
数分待っていると、微々たる振動が地面を伝って感じ取れた。
皆はにやりと「奴が来る」と確信した様子だった。

「気配を消そう。彼は鈍感だが嗅覚だけは優れているからな」
「はい！」と5人の男は返事をしたが、一人だけ返事をしなかった。
それを隊長は見逃さなかった。
「どうした、平？元気がないぞ！返事はしっかりだ！いいな！」
だが返事をしない平隊員。その様子を見て呆れたように平へ隊長は背を向けた。
（こんなことしてられるかよ・・・俺が想像してた安全隊はこんなんじゃない）
屈服の表情を漏らす平。しかしそんな暇はもうすでに無くなっているようだった。
そう目の前にはターゲットの「奴」がいたのだ。
奴は3m程の図体で、色は真っ黒で、のっぺらぼう。そのため目がついていない。
だが代わりに嗅覚が発達し、においをかぎ分けて生きていた。
泥のような皮膚の色・肌触りとのっぺらぼうから、名前はどろん坊。
安全隊の中だけの
名前のようだ。
彼は別な宇宙から現れた異次元人（いじげんちゅ）で、地球に来る際、偽装パスポートを
使ったため、今日のターゲットになっていた。
地球に来た目的は、「自販機の中のドリンク」で、でかい図体で自販機を開け、
中のドリンクを飲んでいるため、犯罪者としても扱われている。
「よし！ターゲットの背後に回り込め！」
隊長が合図を出すと、3人の男が背後に回り込み「スーパーボール弾」を打ち込んだ。
見向きもせず、自販機へ歩いていくどろん坊の進行方向先には、B班が。
「スーパーボール弾、発射！」

銃口から発射された弾の一つが、顔面に直撃し、どろん坊は顔に手を当てた。
「ターゲット、一時停止。隊長今です」
「わかった！みんな離れたまえ！」
ジープの後部座席に積まれた圧縮装置のカーソルを、どろん坊に合わせる。
だが、その時だった。
「おりゃあああああ！！！！」
一人の男が、どろん坊に突っ走っていく。その背中には「ＴＡＩＲＡ」と書かれていた。
「お前！早く戻れ！！」
「俺はこんな生ぬるい戦いをしたくて安全隊入ったんじゃないんだ！」
スーパーボール弾をはずして、実弾を入れる平。敵の腹部へと発砲した！
銀玉鉄砲の音のように軽い銃声が、周りを静寂へと変える。
「バカ野郎！奴がキレるだろ！今すぐ配置に戻れ！」
隊長がメガホンで平に言った時には、もう遅かった。どろん坊の体色は
ムツゴロウが潜んでいそうな泥色から、校庭をちょっと掘った時に出る赤土色へ変わった。
これがどろん坊が起こっている証拠らしい。
「くそぉ～作戦失敗だああ！！！こうなったら逃げるしかない」
平を除いた兵隊さんたちは、一斉に逃げ出した。平は一人茫然と立っていた。
どろん坊は口から粘着性の高い粘土を吐きだし、逃走を進行を妨げる。
平めがけて粘土を吐きだすどろん坊。平はかわそうとしたが、右足に粘土が。
地面に右足がくっついて逃げることが出来なくなったのだ。

「くそぉぉ！！」
やけくそになって、銃口を向けて発砲する平。
「もう仕方ない・・・平はあきらめよう」
隊長はあきらめの境地で逃走していた。しかしまるで後光が差しているかのような
まぶしい光を放った男が向こうに立っていた。
男の風貌は下駄を履き、左腰に刀を差し、ちょんまげをつけている。
身長は大きめで１８０以上はありそうだった。侍と言えば分かりやすいだろうか？
「ここであきらめるなんて、男らしくないぜよぉ～！！」
と言い放ち、男はどろん坊めがけて走っていった。
「待て！そっちは危ない！」と隊長が言おうとした時だった。
一瞬とはこのことなのか？と思うくらい、いやもしかしたらもっと速いかもしれない。
どろん坊の目の前にいた男が、飛び上がりどろん坊の顔面を切り裂いた。
「ぶしゃあっ」って感じの音が鳴ると同時に、顔面から大量のオレンジジュースが。
どろん坊はそのまま倒れていき、ジュースが血のように流れ出ていった。
「あ・・・・あいつ・・・何者だ？」
「はっはっは！心地いいぜよ！最高ぜよ！」
男は懐からデジタルカメラを取り出して、どろん坊の死骸を撮った。
みるみる赤色が黒色に戻っていく。
隊長が平の元へと駆け付け、粘土を取り払った。
「お前、なにしてんだぁ！」隊長の拳が振り下ろされた。
「俺はこんな糞みたいな安全隊に入ったんじゃない！昔のように、もっと強くて
格好良い、あの侍みたいな安全隊に憧れてたんだ！」
平のまなざしは熱く、隊長の目を睨みつけていた。

「ほほう。面白い男ぜよ。だがなぁ、自分の力量も分からずに戦うのはいかん。
危うく死ぬとこだったじゃないか。もっと鍛えるんだな」
懐から今度は煙草を二本取り出し、ライターで火をつける。それをそのまま口へ。
ふぅと息を吐くと同時に、煙が口から出る。すると男は、下駄の音を響かせ
さっき来た道を戻っていった。
「あの！！侍！俺を、俺を旅に同行させてくれ！名前も何にもあんたのこと知らないけど
あんたみたいな男になりたいんだ！頼む！」
侍の背中に深々と頭を下げた。目一杯、思いが伝わるように。
「・・・・・・好きにしなはれ、来るなら甘ったるい安全隊の心得を捨ててな！」
脚を一瞬止めたが、侍はまた歩き出した。
平は頭をあげて、走って侍の元へ。だが平は忘れていなかった。
「今までありがとうございました！これからもがんばって」
隊長に深々と頭を下げ、平は走っていった。

これが平と侍の出会いでもあり、遠い未来の小さな出来事だった。

第一話　「過去と未来と異次元と」

「着いたぜよ！日本の夜明けは近いぜよ！」
そこには大きな電波塔。赤と白の電波塔がそびえたっていた。
「今でもあるんだな。この電波塔。俺が任務で行った時代・・・
確か２０１１年に
　スカイツリーとか言う新しい電波塔ができてて、影が薄かったんだよなぁ～」
平が赤と白の電波塔を見上げる。２０１１年と変わっていないようだった。
しばらくの間、電波塔を味わった二人は、電波塔の足元にあるラーメン屋の屋台の
席に座った。のれんには「風麺」と書かれていた。
「おお、安全隊の方だべか～？」
席に着いた瞬間、屋台のおっさんに驚かれた。そう言えば平は着替えてない。
だから軍服の背中には「ＴＡＩＲＡ」と書かれたままだった。
「ああ・・・そうです。あ、そうでした・・・か」
「へえ？やめちゃった？まあいいんでねえか？自分の決めた道だべ」
こちらの事情も知らないまま、淡々と話しを進めていく屋台のおっさん。
平はやれやれと言った表情で、メニューを見た。
メニュー一覧には「味噌ラーメン」「醤油ラーメン」「塩ラーメン」の三つが
紙のサイズの割にたいそう小さく書かれていた。
その紙の余白を埋めるかのように、でかでかと書かれていたのは、
「巨大ナルトラーメン」
一体何なんだろうか？この優遇の度合いは・・・。

「じゃあ巨大ナルトラーメン一つくれや！」
「じゃあ俺も。お願いします」
「あいよ！んで、話変わっけど侍のあんた、時代前人だべ？」
そう言えば聞いてなかった、と思い、平はおっさんが言ったことについて、
静かに二人のやり取りを聞いた。
「そうや！江戸末期から来たんや」
「俺も時代前人でなぁ。２０１０年に風都っちゅう街にいだんだよ」
「そうかぁ！しかしなかなかすごいなぁ。今の時代っちゅうのは」
何万年も前の人間が、この時代に来たらこの反応は当然だろう。
寧ろ、この程度しか驚かない二人に、妙な違和感を覚えた。
「はい、巨大ナルトラーメン一丁あがり！」
器を見ると、ナルトが器のようにラーメンを包み込んでいた。
「ほほぉ～なかなかじゃのぉ～」
あっけにとられるやいなや、平は口にラーメンを運んだ。
「う・・・・美味い！！！」
あまりのおいしさに叫んでしまった平は、店主と侍の冷たい視線に背を丸めた。
とは言いつつも侍も、リスみたいに両頬にラーメンをほおばっていた。
老舗の味とでも言うんだろうか、二人は完全にこのラーメンの虜になっていた。
「ごちそうさまでした」
ラーメンの熱気で汗をかいた額をティッシュでふき取る。
侍は懐から煙草を取り出した。箱ごとだったため、何を吸っているか分かった。
「わかば」と書かれたパッケージ。あの一つだけ安い奴だ。
手を合わせ、ごちそうさまのあいさつをし、平と侍は席を立った。
「じゃあ行きますか。侍さん」

その時だった。女性の悲鳴が、ビル裏から聞こえ、二人は走り出した。
走り出した際、風麺に入る客と肩がぶつかった。
「すまん！ごめんな！」
急ぎの用事だったため、平はその程度でしか謝らなかった。
「ああ、大丈夫だ。探偵はハードボイルドに決めなきゃな・・・」
崩れた服装を整えて、ハットの鍔を人差指で触った。
「おお！翔ちゃん、久しぶり！！」
風麺の店主はその男に元気にあいさつをしていた。

第一話　「過去と未来と異次元と」2

「そこまでだ！ナン番！」
ビル裏での悲鳴、それは異次元人に襲われている女性からだった。
異次元人ナン番。両腕と両足、胸部と顔面にそれぞれ電子パネルがあり、
顔面には？と書かれて、その他の数字は？だった。特に規則性はないようだ。
「早く逃げるぜよ！向こうに行ってな」
驚いているナン番の隙をついて、侍は女性の背中を押して回避させた。
「こっちだぁナン番！来いよ」
スーパーボール弾を打ち込むと、まんまんと平に反応し平に目を向けた。
平は続けざまにスーパーボール弾を撃ち込む。だがそれをナン番はするりとかわす。
ナン番は動きが速いらしい。数字とは無縁の能力だ。
しかし、平はこれをすでに見抜き、ある戦法をとっていたのだった。
「あー！ナン番、後ろ見ろ！」
疑いなく振り返ると、そこには先程のスーパーボールが飛んできた。
平は外してもよいように、角度を考えて壁に跳ね返った間接技を仕掛けていた。
言うまでもなくそれがナン番にあたり、ナン番の電子パネルが傷つく。
「平、お前がこいつは処理しろ」「え？」
侍は戦おうというそぶりを見せず、脇差の刀にかけてた手を下した。
ナン番に背を向けて、侍は煙草を吸いながら歩いて行った。
「どこ行くんだよぉ！おい、まだ終わってねえぞ」
「ラーメンを食いに行ってくる。ナルトラーメンの替え玉じゃ」

返答にあぜんとする平だったが、そんな暇はなく諦めて戦闘態勢に入る。
「ったく・・・仕方ねえ」
ナン番の背後に周り、もう一度スーパーボール弾を撃ち込む。
すると先程のようにまたかわす。今度はナン番は飛び上がった。
もう一度跳ね返ってくるスーパーボールがナン番に再度あたりそうになるが、
学習していたらしく、それもかわし、ボールは平の元へ。
「痛いっ！」
スーパーボールが見事に平の額に当たり、平はのけぞった。
「てめぇ～・・・頭だけは利口だなぁ～！」

～風麺～
「お、侍さんまた来たのかぇ？」
「妙に忘れられなくてなぁ～、替え玉いただけるか？」
もちろん、と言い店主はラーメンをつくり出した。湯気が立ち込める。
「どうや・・・うちの弟子は。なかなかええ目をしとるやろぉ」
侍はとなりの席に座っている男に話しかけた。その相手とは、先程平と
ぶつかったあの、探偵のハードボイルドきどり男だった。
「ああ、なかなかだぜ」
「お二人とも、知り合いだっぺか？」
店主が二人に聞くと、二人は同時に返事をした。
「俺たちが普段いる世界に、この侍が来たんだ。あの時は助かったな」
と探偵は語りだした。どうやら二人は一度面識があり、侍が助けたことがあるという。
侍もまたそれを覚えていて、感動の再会とまではいかないも、再会

だった。
きっと話したいこともあるだろう、だが探偵は立ち上がり５００円を置いて
席を外した。暖簾をくぐる間際、足を止めた。
「俺の庭にまた遊びに来てくれ」
ハットをしっかりかぶった男は、走ってどこかへ行った。

「おとっと。あぶねぇ」
ナン番の電子パネルが３つ壊れて、体に電流がビリビリ走っていた。
先程よりはナン番が戦闘態勢をむきだし、平と戦っていた。
スーパーボール弾はもう無くなり、実弾が三発となった。しかし前回の勝負の
トラウマのせいか実弾を入れる気力はなかった。
「異次元人には実弾が通用しねえ・・・どうすればいいんだ」
「あきらめるな」
少し高台の所から声が聞こえた。平がふと目線を移すとそこには先程の探偵が
勇ましく立っていた。
「止めてやるよ、俺が・・・」「スタッグ」
メモリガジェットのスタッグが飛んできて、右腕の電子パネルを切り裂く。
続いてスパイダーが蜘蛛糸を吐き、相手を縛りあげる。
相手は拘束されて、自由を奪われていた。
「あとは自分の手で蹴りをつけろ。侍はお前を信じてる」
「侍が俺を！？・・・そうだ、こんなところで・・・」
実弾をセットし、自由を奪われているナン番の顔面に照準を合わせた。
息をのみ、呼吸を整えた平は、左人差指をトリガーにかける。
そして思いっきりトリガーを引き、発砲した。

一瞬にして、ナン番を貫く弾丸。ナン番の顔面の表記が０になった。
そのまま地べたへ。
スパイダーは拘束をやめて、スタッグと共に探偵の元へと戻った。
息をはあはあとつきながら銃口を下ろし、地面に崩れ落ちた。
「お疲れさんやな！」
「これが俺が求めてた・・・・本当の戦いだ・・・・」
平は倒せた喜びと自分の理想に近づいたことで頭がいっぱいだった。
侍は侍で、食べ過ぎて腹いっぱいのようだった。
「あ、そう言えばあの男はどこいった！？」
急にそそくさと立ち上がり、辺りを見回す平だが、もう誰の影も見えなかった。

第三話　「濃すぎ人襲来」

平達は次なる場所へと足を運んでいた。
侍が黙々と歩くのを、平はただついて行くような感じだった。
「そういえば、侍の名前って一体何なんだよ」
「んなこたぁいずれわかる」
の一点張りで、教えてくれるようすは全くないようだった。
「じゃあ俺が今どこに向かってんのか教えてくれよ。何にも分かんないままじゃ」
言葉を遮るように口を開く侍。
「もうついたぞ。ここじゃ」
気付かない間にだいぶ時間が経ち、気付くと下町のようなところにいた。
だが他の町とは様子が違った。靴屋、呉服屋、鍛冶屋などの店舗が並んでいるにも
関わらず、どこの店もすべてシャッターで閉ざされている。
ちなみに今は祝日でも、休日でも、深夜でもない。
「なんだ、ここ？」
「ここが噂の死のシャッター街や」
平もどこかで聞いたことがあったんだろう。一度顔をしかめた。
死のシャッター街。ここは今の経済事情を物語っている模範の町だった。
「みな平等」精神が、人間の基本的思想の今、戦争はまず起こらなくなった。
だがそれは力や暴力だけの争いだけにはとどまらなかった。
商売などの各店舗同士の争いなどが消滅し、それにより経済の成長が送れてしまい
経営の破たんが多くみられ、それにより店じまいする人も少なくはなかった。

その影響で、この街の大打撃を浴びたのだろう。
「争いがあるから、救われてたことだってあるっちゅうことや、なあ濃すぎ人！」
侍は声を張り上げて、誰もいない方向に叫んだ。声がこだまする。
「濃すぎ人ってなんだよ？」
「みてればわかるっちゅうことや、お前等の好物持ってきたでぇ～」
と言うと、侍は懐から容器に入ったあるものを取り出した。
その容器には「育毛剤」と書かれていた。そしてそれを放り投げた。
すると先程まで静かだった空間に、突然物音がしだした。
「うわ！何だよあいつら！！」
「あいつらが濃すぎ人や」
身長９０センチ程度の小さい異次元人が現れた。それも五体位。
見た目はすこしふくよかで、髪が生えている。一匹一匹の毛量はそれぞれだ。
「濃すぎ人は自分たちの階級を、毛量で決めるんや。多ければ多いほど格上なんや」
「だからあいつら、争ってんのか」
育毛剤を前に、それぞれが自分のものにしようと必死に争っていた。
どうやらこいつ等には「みな平等」精神は働いていないらしい。
その様子を見ながら侍はゆっくりと歩き出し、濃すぎ人らの方向へ。
「残念やなぁ。これはお前等のもんじゃない。俺のもんや！」
一匹の髪の毛をつかみ、力強く引っ張ると、鈍い音を出して髪が抜けていく。
すると活発に動き、抜かれるのを拒んでいた濃すぎ人の動きが止まった。
「あれ？死んだ？」
「奴らの弱点は髪の毛や。抜かれるとショックで死ぬ。人間と一緒や」
「分かったじゃあ俺も！」

濃すぎ人へと走り出す平。近づいてきた一匹の濃すぎ人をつかみ上げる。
「おりゃぁ！」
髪の毛を狂うように抜いていくと、濃すぎ人はショックを受けて死んでいく。
さらにもう一匹が近づいてくる。平はそいつの顔面にパンチを浴びせひるませる。
そして再び髪の毛を引っこ抜く。絶叫して死んでいく濃すぎ人。
侍は刀を振り回し、奴らの髪の毛を上手く切り裂いていく。
「よーし、後一匹だぜ！」
その時だった。大きな地震が急におこり出した。

第三話　「濃すぎ人襲来」2

「おぉぉおいっ何だよあいつ！」
靴屋の店の裏からそいつはあらわれた。体長は６ｍくらいだろうか。外見は濃すぎ人と全く同じで、ただ図体がでかくなっただけだった。毛量はわりと少ない。
「やばいぜ、侍。バカにしてたよ、濃すぎ人を・・・」
平の話も聞かず、巨大濃すぎ人に立ち向かっていった。
下駄の音を響かせて、走っていくと、飛び上がり刀を振り上げた。
しかし短い腕を使って、近づく侍を弾き飛ばす。
侍は飛ばされて、靴屋の屋根に落ちた。
「侍！おい大丈夫か！」
「・・・ああ、大丈夫や、こんなもん。ただ至近距離からの攻撃は無理や」
刀と言う物は至近距離での攻撃にたけたもの。だが遠距離からは非常に難しい。
距離を詰めたところで、巨大濃すぎ人に弾かれるだろう。
だが今の二人には、平の安全隊時代の所有武器「アマチュアガン」しかない。
それどころか以前の戦いで、実弾を使い切り、手元にはスーパーボールしかない。
こうしている間にも巨大濃すぎ人は、平に近づいてくる。
「やべええ！！」
声を上げながら走りだし、後ろを振り返ると奴も追いかけてくる。
もう一度進行方向を振り向くと、なんと濃すぎ人が待ち構えていた。
濃すぎ人は石をつかむと、向かってくる平へと投げた。
その時だった。
「平！おりゃ」
平の脇腹にタックルし、平を石から守る者がいた。

「いてて・・・って、隊長!!どうして!?」
「俺たちをなめるな。安全隊だぞ!異次元人が出たら圧縮封印するのが任務だ。
ここにいて当然なんだぞ。それにそろそろお前の弾切れかと思ってなぁ。
この小僧濃すぎ人は俺に任せろ。お前はこれでかい方を頼む」
握られていたのは「発火弾」と呼ばれる、安全隊が作った弾丸。そしてもう一つ。
「マスターガン・・・!隊長のものじゃ!?」
「いいんだ、俺もぬるい任務は嫌いだからなぁ。だが偉い立場上それは使えんからな。
お前に使っていただきたい」
「ありがとうございます!!俺行ってきます!!」
弾丸をセットし、平は正面を突っ走っていった。
走りながらカーソルを相手の頭皮に合わせる。そして彼は立ち止った。
(俺がとどめをさしてやるよ・・・こんな奴)
「おさらばだぁぁぁぁ!!!!!」
引き金を引くと、平が吹っ飛ぶほどの反動で弾が撃たれた。
そしてその弾は相手の頭皮に直撃、たちまち引火して炎が広がった。
すると最後はやはり小さいのと同じで、ショック死のように四肢を放り投げ死んでいった。
「大丈夫か?」
「ああ、大丈夫だ。しかしよくやったなあ・・・」
瓦に埋まった体を救いだして、屋根から降りる二人。

第三話　「幡番」（前書き）

今回は侍と平の出番は休ませて、もう一人の主役のお話にします。

第三話　「幡番」

「ありがとうございました。隊長。俺死ぬところでした・・・」
「お前は俺の教え子だからな、ピンチな時はお互い様だ。そのマスターガンを大切にな」
平は深々と隊長に一礼をした。
「侍さんよ、俺の教え子を頼んだぞ」
隊長は侍へ一言言うと、乗ってきたジープに乗って、エンジンをかけた。
そしてアクセルを踏み、走り去っていった。
窓から右手を出して、手を振る隊長へ、平はもう一度一礼をした。
平の手には、マスターガンと発火弾が握られていた。

～Ｐ４８地区～
「大切な人に届けるメッセージ花火はいかがですかぁ？」
花火師の幡番（のぼりばん）は、今日も花火の販売にいそしんでいた。
花火業界も経済の打撃は大きく、沢山の花火師がその職を手放し、今は他の仕事をしている人も
少なくはなかった。そんな中で若き新鋭の幡番は大変貴重な存在とされていた。
彼の夢は一流の花火師である。
「お兄さん、手持ち花火赤と青２本ずつくださいな」
「あいよ、おばさんいつもありがとうさん！はい５０円だよ」
５０円を受け取り、袋から青と赤の手持ち花火を二本ずつ取り出し、おばさんへと渡した。
「また今度も頼むよ。うちの息子があんたの花火好きでなぁ、長続きするんだと」
「俺の花火はそれが自慢や。息子はよう見とる。さすがや、ほな」

軽トラックに乗って、番は車を急がせようとした時だった。
数１０メートル先に見える看板から、爆発音が聞こえるとたちまちけむりが上がった。
「なんや！？」
車を止めて煙が包む中、足を急がせる。すると何者かが忍び足で逃げていくのが見えた。
「何だあいつ？・・・・まさか！」
走って奴を追いかけると、その者の姿は見えなくなっていた。しかしあることに番は気付いた。
（囲まれた！？）
煙の中にいるせいでよく分からないが、二人から三人ほどの足音が聞こえる。
「だれや！お前ら！」
「煙の中、気付くとはなぁ・・・なかなかやる奴や。ばれちゃあ仕方ねぇ、殺せぇ！」
すると背後から何者かが近づいてくる足音が聞こえてくる。振り返ると刀を持った男が番へ
近づいて来ていた。彼は刀を振り下ろしたが、それを何とかかわし、続いてくる敵の刀も
続けざまにかわしていた。
「なかなか身軽だなぁ。おお、煙が消えたなぁ。ここから正々堂々勝負じゃぁい！」
二人の男が刀を振り下ろしてくる。それを寸前の所でかわしていく。攻撃をする暇もなく、番はかわすことで精いっぱいだった。
「はあ・・・はあ・・・間違った火の使い方しちゃあ、俺が黙っちゃいねえぜぇぇ！！！」
刀をかわし、隙ができた腹部にパンチを打ち込み、もう一人の攻撃を足で蹴り倒す。
どうやら番は多少武道をかじっていたらしい。
華麗に二人を圧倒する番は、相手の刀を下駄で弾き飛ばす。

「わいの力なめんなやぁ！」
「・・・・っく仕方ない。。。大将、出番や！」
すると向こうから、草履を引きずる音が聞こえ、男が現れた。
手ぬぐいのようなもので、自らの口元を隠している。
「お前が大将か？」
「ああ、こいつらにあの看板を引火させろと言ったのも私だ」
「間違った火の使い方をする奴は俺が許さねぇ。かかってこい」
男の見えない口元が一瞬動く。顔がにやりとしたのが分かった。
「刀人（かたなじん）、舟羅の腕にかけて・・・はあっ！」
刀人。人間に似た顔と生態を持つ。だがそれはあくまで仮の姿であり本当の姿は怪物である。
主に剣技を得意とし、刀の他に槍人や弓人、銃人が存在している。
舟羅は番めがけて刀を取り出し、向かってくる。
番もその動きを見て、一目散に走っていった。丸腰の番が少し不利である。
「死ねぇぇぇぇ！！」
刀を振り上げて、大きく振り下ろそうとした時だった。
「そこやぁぁ！」
スライディングして相手の膝元に蹴りを入れて、相手のバランスを崩すと、そのまま立ち上がり
背後から相手を蹴り倒す。
「ぐはあっ」
「どんなもんじゃぁい」
「貴様・・・・よくもこの我に醜態を・・・絶対に殺す！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063s/

NEXT　GENERATION

2011年10月8日02時35分発行